

高さ 86.5 センチ、幅 45 センチ、奥行き 31 センチの白大理石製聖母子像が個人コレクションに存在している。完全な丸彫りで背面も豊かに磨かれている。しかし聖母のかぶる冠、手に持つ本、玉座には未完成的処理がなされている。ミケランジェロのともいえる豊かなひねりを示す幼児キリストは、ピサ大聖堂内ティーノ・ディ・カマイーノ作皇帝ハインリッヒ七世の墓を構成していた螺旋円柱に施されたブツ達のレリーフを想起させる。磨かれた大理石表面と未完成的処理の部位の対比に関しては、帝墓下方の聖バルトロメオの祭壇上の傭兵隊長フランチェスコ・デッラ・ファジョーラ像が示した、彫刻に絵画的効果を与える独特の芸術手法が想起される。又右手を胸元に置き、頭部を左上方に向け、両足の膝から下を右方向に平行に下ろす幼児キリストのポーズはティーノのナポリ期の傑作、「デトロイトの聖母子」に通じるものがある。

一方聖母の豊かな肉づき、えらの張った頬、大きく見開いた目、扁平な冠、頭部の頂が平盤に表される点等はティーノのピサ期の傑作、現フィレンツェ・バルディーニ美術館の慈愛像が想起される。幼児キリストが上を向き、勢いよくポーズする様もその慈愛像における二人の乳飲み子のエネルギッシュな動勢表現に相通じている。ちなみにティーノはナポリ時代、カテリーナ・ダウストリアの墓で、豊かな髪を誇り勢いよく左上方を見上げる乳飲み子を従える、えらの張った頬を持つ乳母の姿をしてやはり魅力的な慈愛像としていた。かくして新発見の聖母子像の作者はティーノの諸作品とりわけ慈愛像への関心を強く抱いたものと考えられる。私はかねてより、ティーノ作バルディーニ美術館の慈愛像に対するニコラ・ピサ説教壇内慈愛像から来る様式的影響を認めていたが、背景としては両作ともにフィオーレのヨアキムによる第三の段階の理念、即ち父と子に続く聖霊の段階、老人と若者に続く「幼児の段階」の理念が息づき、愛と自由、友情に満ちたユートピア到来への希求が存在していたという要素があった。即ちニコラ・ピサ説教壇は、ヨアキムにより第三の段階の始まる年とされた 1260 年の年記を示し、それ故にも見事な慈愛像が一連の徳目を示す小彫像の先頭に示されていた。同年から数え半世紀、イタリア皇帝派のリーダーとしてのピサはアルプスの北方から新皇帝ハインリッヒ七世をキリストの再臨、第三の段階のもたらしてとして迎える準備にいそしむ中、ティーノは皇帝支配による良き政府、愛の時代の象徴としてバルディーニ美術館蔵「慈愛」を生み出すに至ったのである。

ヨアキムの思想は皇帝派の牙城ピサに於て 13 世紀も早くから受け入れられたが、政治的に対立したナポリでもアンジュー王家の聖ルドヴィコ、弟のロベルト王、その妃サンチャにより深く信奉されていた。それ故にも数々の慈愛像の名品の影響を示す聖母子像が、アンジュー朝ナポリのヨアキム主義への信奉を象徴するものとして筆頭彫刻家ティーノにより作成された可能性があり得るものと思われる。

聖ルドヴィコやロベルト王の母たるハンガリーのマリアは 1323 年 3 月に他界した。墓は

彼女が再建したサンタ・マリア・ドンナレジーナ教会内に作られるべく定められ、ティーノにより 1326 年に完成した。その際墓内の一天使像は同教会正面壁を反映した教会模型を抱く姿で表されたが、中央門上には尖頭アーチで縁取られ、何の彫像も未だ置かれぬタンパンの様子が映し出されていた。ティーノは同教会内にハンガリーのマリアの墓のみならず、主祭壇も設置したが、やがて正面壁外部中央門上に置くものとしてまさに新発見の聖母子像を制作した可能性があるのではあるまいか。ティーノにこうした聖母子像を発注したロベルト王の目的は母マリアへのオマージュたらんとするものであったろう。母の横臥像を乗せた石棺前面中央には聖ルドヴィコの姿が位置し、早世した長男のカルロ・マルテッロそしてロベルト王が右左に表されていた。聖ルドヴィコと母マリアの絆がそこで強調されたのは、アンジュー王家が聖性により継続が保証される点を象徴する為であった。いずれにせよサンタ・マリア・ドンナレジーナの名のつく教会の正面壁上に主としての聖母子像を設置する際、堂内の墓の表現で展開した母マリアと息子ルドヴィコの絆が再び強調させられたと考えられるのではなかろうか。新発見の聖母子像の聖母の面貌はハンガリーのマリアの墓における主人公の横臥像のそれに近似し、又幼児キリストはカポディモンテ美術館蔵のシモーネ・マルティーニ作「聖ルドヴィコにより戴冠されるロベルト」の豊かな髪の毛を伴うルドヴィコ、その肉つき良い丸顔を想起させるものがあるからである。

偉大な発注者の存在、サンタ・マリア・ドンナレジーナ教会正面壁という設置場所、そしてハンガリーのマリアと聖ルドヴィコをモデルとして反映すべきであった特殊状況からして、格別雄大でエネルギッシュ、大胆で力強い精神の息つくところとなった当聖母子像はナポリ期ティーノを代表する傑作と認められよう。